

海の中にできた畑

(成山新田ものがたり)

たつの市御津町

きょう 今日も朝早く夜が明けないうちから、成山
 しんでん 新田では農家の人たちが大根ひきに精を出し
 ています。

ここ成山新田は、御津町苧屋地区の揖保川
 の河口にある、海へつき出た広々とした
 干拓地です。畑一面に大根やにんじんが栽培
 され、青々とした葉っぱが海からの風にゆれ
 ています。

しゅう 収かくされた大根は、たいへん味がよく、
 こうきゅうひん 高級品として姫路や阪神間の市場に出荷され
 ています。

いま 今では、豊かな畑が広がる成山新田です
 が、このようになるまでには、ここを干拓し、
 のうぎよう 農業ができる土地にするために、たくさん
 のひとびと 人々の大きな苦勞があったのです。

この苧屋沖の砂浜を、本格的に干拓しよう
 かんが と考えたのは、大阪の商人だった成山徳三郎
 でした。

もくひょうめんせき 目標面積を七六ヘクタールと決めて、多く
 のひとびと 人々を集め、干拓の工事に取りかかったの
 です。

一九二三年(大正十二年)ころには、堤防
 なか の中に五〇ヘクタールの土地と二〇ヘクター

ルほどの池ができあがりしました。

徳三郎の方で、初めて本格的な畑が完成したのを知った農民たちは、大喜びでした。

しかし、ある秋の真夜中のこと、

「おーい！ 早く畑にあつまってくれーえー！」

一九二八年（昭和三年）、大声で叫ぶ成山組合長の声を聞いて、人々は着の身着のまま、畑の南に築かれている防潮堤の付近にかけつけました。うす明かりの中に、荒れ狂った真っ黒な大波が、堤防を乗りこえ、収か中間近かなサツマイモ畑をおそっているのが見えるではありませんか。

夜が明けて、あたりのようすを見た徳三郎や農民たちは、サツマイモ畑の姿を目にしてぼうぜんとして立ちつくすだけでした。

収かく前のりっぱなサツマイモが、波に押し流され、掘り起こされ、すべてが塩水につかってしまい、見るも無残な姿に変わりはてているのです。

「ああああ、これでは、売り物にはならんわあ。それに、畑がすっかり元の砂浜にもどってしまつて——。」

人々は、がっくりと肩を落としました。

「せっかく苦勞して開いた畑や。このままにしておくわけにはいかない。」

次々とむずかしい問題が起きる中、それでも徳三郎は次の日から、畑を元にもどす工事にかかる費用を得るために、知人や銀行をたずね歩き、お金を出してくれるようお願いしてまわりました。そして、また人々を集め

て、何度も土を運び、くずれた堤防を直して、
やっとの思いでふたたび野菜の植え付けがで
きるまでにしたのでした。

しかし、それもつかの間、一九三三年
(昭和八年) またまた大きな台風が押し寄せ、
せっかく収かくができませんはじめた畑の作物を、
根こそぎ海水で押し流してしまいました。

さすがこれには、がん張り屋の徳三郎も、
畑を元にもどそうという元気がなくなってい
きました。

「もう、やめた。いくらがん張ったって、
自然の力には勝てそうにない。農家のみなさ
ん、私は成山新田の開発は、あきらめること
にする。今日まで協力してくださった方々、
許してください……。」

こう言って、とうとうその場にすわりこん
でしまったのです。

御津小学校の校門にたくさんの子どもたち
が立ち、募金箱を持って必死になって呼びか
けています。

「みなさん。成山新田にもう一度豊かな畑を
とりもどしましょう。徳三郎さんのために、

私たちもたとえ少しでも募金し、成山新田の
復興に役立てましょう。ご協力ください。」

「わずかなお金ですが、成山新田を一日も早
く元のように直し、御津村を発展させるため
に力を注いでください。」

児童の代表が、真剣なまなざしで、心のそ
こから徳三郎にお願いしました。
すっかりやる気を失っていた徳三郎も、こ

の子ども達からの義援金に、大きく心を動かされました。

「よし！ もう一度がんばってみるか。」すくっと立ち上がると、いつものように成山新田の向こうに広がる播磨灘の海を見つめました。

徳三郎は、子どもたちの義援金にお礼の気持ちを表し、一九三四年（昭和九年）御津小学校に「二宮金次郎の像」をおくりました。その後、度重なる台風による暴風雨や高潮におそわれながらも、成山新田で農作業をする人々を守るために、たくさんのお金を使って、堤防を高く強くし、畑の土を入れなおし、野菜が豊かに育つように農民たちを応援したのです。

しかし、一九三八年（昭和十三年）徳三郎は、前の年に襲った大きな台風でくずれた堤防を直す工事のための資金を得ることができず、新田を手放すことになってしまいました。持ち主が次々と変わって、成山新田を守る人がなくなりました。そのため、土地は荒れるにまかせ、一九四〇年（昭和十五年）ごろには、元の砂浜のようにもどり、周りに堤防のあとが残る干潟同然のみじめな姿に変わっていききました。

一九四六年（昭和二十一年）、御津町長の八百亀治は、自作農（自分の田んぼを持ち、自分でたがやす農家のこと）を増やし、食料の生産をはかるといふ国の方針を進めるために、荒れはてた成山新田を再び干拓で

きるように国や兵庫県に働きかけました。

そして一九四七年から工事が始まり、一九五一年（昭和二六年）に五八ヘクタール（第一期工事）が完成し、引き続き、一九五五年（昭和三〇年）から一九五七年（昭和三二年）には、十一ヘクタールの土地が造成されたのです。（第二期工事）

この間に、高潮が押し寄せても、海水が入らないようにするため、コンクリート製の強大な防潮堤や樋門（水を海に出す水門）がつくられ、農家の人々が安心して野菜を作ることができるようになったのです。

江戸時代から干拓が進められてきた播磨灘周辺の新田は、工業が発達し人口が増えるにつれ、次々と工場や住宅地が変わっていきま

した。

しかし、成山新田だけは、もくもくと野菜づくりが続けられています。また「御津野菜センター」などが建設され、新鮮な野菜を早く売り出すため収益も高く、若い人たちも野菜づくりを受けつぎ、将来への明るい展望が見えています。

何度なんども高潮の被害に会いながらも、御津町の農民のために力をつくした徳三郎、その徳三郎のように、ねばりづよくあきらめずがん張ってほしい……。

そんな思いをこめながら、中庭の銅像は、今日もやさしく子どもたちの学び姿を見守っています。

